カトリック高松教区報

2006年5月7日（第111号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659
FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

どのような教会であればよいのだろう

高松教区長　溝部　脩

先日「一〇年後の日本」（春秋新書）という本を読んだ。同書では、一〇年後の予測が書かれていて、興味深いというか、恐ろしいというか、非常に複雑な感想に私はとらわれた。それも団塊の世代といわれる人たちが、団塊となって定年退職を迎えることによる問題提起となっている。何か政治の問題と複雑に絡み合っている問題提起であることは承知の上である。これは宗教の問題とも深くかかわっているし、教会の切実な問題でもあり得る。読んだ知識ではあるが、この新しく定年を迎えて熟年、老年の仲間入りする人々は、今までの老人たちと違ってもっと質を求める時代と思われる。人生の意味を求めている世代が断然増えていく中で、指をくわえて「人が来ない」などとぼやいていても仕方あるまい。どうして来ないのか、何が今の教会には欠けているのか、やはり真剣に考えてみる必要がある。

一〇年後・・・もっと質を高めるには

しろ数が多いので、経済的にも、文化的にも今後の日本に大きな影響を与えるというのである。

さて、多人数だから起きる経済的問題とか、その他の政治的問題はさておいて、むしろ数を頼みとしたこの世代が、定年退職を迎えて後どのように過ごすのかということに、私としてはもっと大きな興味を抱いている。勿論、経済とを作り出すといわれている。とすれば、精神的な必要に答える教会なども、もっと質を高めていく必要がある。

質を高めるとはどういうことであろう。何となく聖書の勉強会を開くことでもないし、お祈りに没頭することでもなさそうだ。いわゆる生きている人間の問題に目覚めて、それに参与する方法を熟年層に提示できる宗教となることだ

聖土曜日復活徹夜祭にて

はばたき

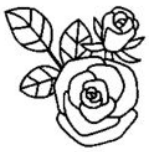
五月を「マリアを敬う月」とするマリア信心はローマ人やゲルマン人の春の訪れを祝う五月祭を背景に、すでに中世に始まっている。

だが五月を通してマリア様のために祈り続ける信心は、近世になってからのようである。暑い夏には程遠く、じめじめした梅雨にも間がある五月。花咲き、風かおる五月を、マリア様の月とするのはとても相応しく思われる。

昔はたいてい教会に洞窟とマリア像があったものだが、今ではほとんど見られないのは何故だろうか。

今時珍しいほどの「ルルドの洞窟」の一つは、三本松教会にある。これはマリア様を殊のほか敬愛しておられた故山下神父の時代に、信徒数人で手作りしたと伺っている。

今年もこの三本松教会で、五月二八日に恒例のルルド祭が行われる。



お迎えする教区のシスター

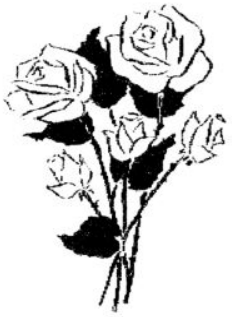
喜びのうちにキリストを伝えたい

生涯養成委員会委員長
Srメリー・ギリス

高松教区の皆さま、初めまして、四月から高松教区事務局で働くことになったシスターメリー・ギリスです。

カナダの東にあるプリンスエドワード島（「赤毛のアン」の舞台になっている島）で生まれ、五三年前にコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会に入会しました。来日したのは四一年前の一九六五年ですが、最初の二年間は、東京にあるフランシスコ会の日本語学校で勉強しました。その後、修道会が経営する北九州市の明治学園と福島市の桜の聖母学院でずっと教育に携わってきました。教育の中で何よりも伝えたいと思ったのは、その子ども一人ひとりがどれほど神様に愛されているのか、神様の目にはどれほど尊い存在であるのかということでした。

今までは教会の大切な活動である「宣教」を学校教育を通してしてきましたが、今度は皆さまと共に直接教会のために働くことができるのを心から喜んでおります。「生涯養成」の内容についてはまだまだ把握していませんが、五十年以上の修道生活の中で私自身はたくさんの人を通して学ぶ機会に恵まれましたし、時代と共に福音を伝えていくための工夫の大切さも痛感しています。だからこそ皆さまと力を合わせて、二〇〇六年という「今」の中で復活されたキリストを喜びのうちに伝えていきたいと思っています。皆さまのお祈りを頼りに・・・。



会議報告

司祭評議会
協力宣教司牧
四月から全地区で

二〇〇六年度司祭評議会は、二月七日に第一回、三月七日に第二回が開催されました。主な討議内容は次の通りです。

１　二〇〇七年四月からの新会計システム実施に向け、説明会が行われている。第一回は二月二六日に、カトリック会館で教区全体の説明会を行った。第二回は八月一九日松山教会、八月二〇日カトリック会館で行う。第三回は一一月一八日松山教会、一一月一九日カトリック会館で行う。第二回、第三回は都合の良い会場の方に必ず参加されたい。

２　デ・ボッタリ教皇大使は、五月六日から一一日まで高松教区の特別視察を行うことを決定した。概ね次のような日程。

六日＝高松到着。司教様との対話
七日＝一〇時ミサ（カテドラル）
　修道女との対話
　坂出教会、聖マルチン病院訪問
八日＝司祭との対話
　香川県知事訪問
九日＝国際神学院訪問
一〇日＝カタリナ大学訪問
一一日＝一〇時ミサ（松山教会）
　信徒との対話
　松山より帰京

３　四月から、全地区で協力宣教司牧を実施する。ゼロからの出発で、しばらく手探りの状態が続くが、先ず司祭たちがある程度共通した教会観を共有し、教区目標の一致に向けて司祭および信徒間の協力を推進していく。

４　池田教会にロメオ師が主任司祭として着任し、外国人の霊的交わりのセンターおよび青年層の黙想会、研修会の場として池田教会を活用していく。

５　聖霊降臨祭に出される司教教書のテーマを「聖体」とすることに決定し、その骨子を検討した。

教区事務局長　浜口末男神父

宣教司牧評議会
高松教区が取り組むべき
優先課題等検討

第一回の宣教司牧評議会が二月二五日に開催され、三月三一日には役員会が開催されました。主な討議内

容は次の通りです。

１　宣教司牧評議会の前身である信徒使徒職協議会で準備された高松教区宣教司牧評議会規約を検討し、決定した。

２　宣教司牧評議会の役員として次の方々が選出された。この方々は二ヶ月に一回開催される役員会に出席し、司祭評議会とともに、教区運営の二本柱となり活動をしていく。

【役員】

溝部司教（会長兼議長）、松永洋司師（副会長）、浜口末男師、Sr竹中史江、今泉芳純、岡副俊雄、高田芙美、中越恵美、西川康廣（書記）

３　一〇月一八日から二二日までタイ・チェンマイで開かれる東アジア宣教大会「宣教と文化土着化」に、高松教区から西川康廣氏を派遣することに決定した。

４　二〇〇六年度の「教区民の日」は県単位で開催し、テーマは「聖体」「一致」とする。

５　宣教司牧評議会結成に当たって、高松教区が取り組むべき優先課題について話し合った。

①　教区の将来を考え、青少年宣教司牧委員会が立ち上がった。評議会として種々の要望を出しながら、出来る限りの手助けをすることを確認した。

②　高松教区には邦人司祭の召命がない。外国人も含め、若い家庭を育てるにはどうすればよいのか考えていくことにした。

③　四月から開設される「生涯養成デスク」の助けを借りて、宣教司牧評議会が生涯養成プログラムを主催する。目標は、現代社会に向かってキリストのメッセージを発信することである。

教区事務局長　浜口末男神父

青少年委員会
活動方針決定
「放っておる」体制作り

三月一二日に第二回青少年委員会を開催し、次のような報告と協議を行いました。

１　報告事項

①　日韓大学生交流＝二月二三日（木）～二七日（月）於広島。日本・韓国から各二〇名が参加。ソーラン節で歓迎。日韓片言で交流。ホームステイ、観光も取り入れながら、日韓の学生が共に平和について考え分かち合う良い機会となった。

②　「どうしよう！子どもとの関わり」＝二月二五日（土）於岡山教会。外国から来た信徒の子どもたちへのサポートについて、報告があった

③　青年のつどい準備会＝三月四日（土）、五日（日）於松山教会。四国四県から若者一六名、大人四名参加。当日の日程や役割分担について話し合いや分かち合いを行った。青年たちの意識が高まってきている。

青少年委員会スタッフ

２　協議事項

①　青少年委員会の方針決定

ア　青少年一人ひとりをかけがえのない存在として尊重し、大切にする

彼らの持つタレントや固有の召命を引き出し、それを生かせるようサポートする

自主的活動の支援「放っておる」（※注）態勢

イ　青少年が出会う場、信仰（親交）を深める場の提供、種々のサポート

つどい、黙想会、研修会、キャンプ

そのための場所・資料・人材・資金面のサポート

ウ　青少年が集まりやすい未来の教会像の模索

対象としてカトリック青少年信徒だけでなく、四国内の青少年全員とする

教区の目標・使命を青少年に伝え、逆に青少年の意見・考えを教区に伝えていく

※「放っておく」ではなく「放っておる」＝青少年の行動を放ったらかしにするのではなく、といって事細かく指示するのでもなく、そばにいて見守る。

②　子どものつどい

開催日＝六月三日（土）～四日（日）

場　所＝新居浜。修道院経営の聖マリア幼稚園

テーマ＝「ご聖体とミサについて」または「私たちが作るミサ」。詳細は後日決定

③　高校生活動について

中国ブロック高校生大会に青少年委員から二名が参加。そこで得たことを参考に高松教区内で生かしていく。

青少年委員長　Br八木

各地区だより

東北の旅と仙台教区新司教着座式
感動的な巡礼ツアーに参加して

～後藤寿庵の心～

大阪空港に高松教区の各地区から集まった信者は、空路で仙台にむかって旅立った。仙台空港に降り立った一行は、まだ各所に雪の残る早春の陽射しもまぶしい東北の景色に、これから体験する数々の思いに各自が、期待を抱いている。「今日で良かったですよ。昨日までは雨や雪で大変でした」とガイドさんは優しくこう話しながら、迎えてくれた。溝部司教様の他は、仙台は初めてという人が殆どである。バスの中では資料を手に溝部司教様から東北地方の殉教者の話を聞く。迎賓館のような仙台教区の司教館は素晴らしい造りで、随所に設計者と共に関わった溝部司教様の思いが盛り込まれている。中でも中央にある小聖堂は、まわりに使われているステンドグラスもきれいで聖堂の中にいるだけで心の落ち着きを感じる。そんな司教館を、不意に離れることになった当の溝部司教様はもとより、仙台教区民にとっては、将に青天の霹靂であったであろう。司教館がある小高い丘には、カトリック系病院と、二つの修道院があり、その環境は、祈りの場に相応しい。バスは東北自動車道を北上し岩手県水沢市へ向かう。水沢教会では佐藤修神父様と、信徒の方と共にミサに与る。一六一〇年代に現在の水沢市福原の領主となった後藤寿庵は胆沢川に「寿庵堰」を設け、農業の近代化に尽くすと共に、すでに洗礼を受けていた寿庵は、カトリックの宣教にも大いに力を注いだ。今では五月最後の日曜日に、多くの信徒が集まって「寿庵祭」を開くという。

寿庵廟の前で
溝部司教と佐藤修神父（右端）

～仙台教区司教着座式～

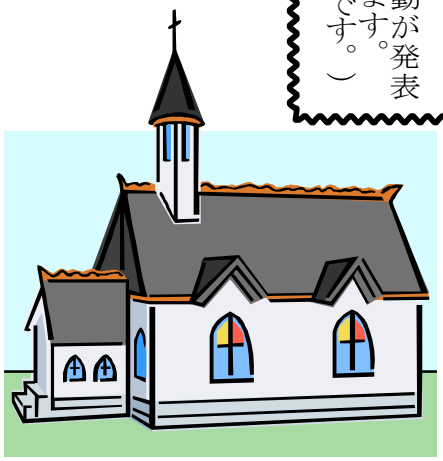
二〇〇六年三月四日、又もや司教座空位となっていた仙台教区に、待たれていた新司教が誕生する。お祝いと答礼に駆けつけた高松教

司祭の異動

三月一二日に高松教区司祭の異動が発表されましたので、お知らせいたします。（「モデラトール」は責任者のことです。）

司祭名	新任地	前任地
ホルヘ・ソーザ	鹿児島教区小宿教会主任	桜町教会助任
ロメオ・ベルナベ	池田教会主任	新居浜教会助任
ブラッドリー・ロザイロ	高知地区協力宣教司牧協力司祭	大阪教区伊丹教会主任
岡本哲男	松山教会 松山地区協力宣教司牧モデラトール	東京聖ヨゼフ修道院

司祭名	新任務
ルイジ・シメオーニ	池田教会協力司祭
諏訪栄治郎	高知地区協力宣教司牧モデラトール
土佐義和	高知地区協力宣教司牧協力司祭
サトルニノ・ゴンザレス	松山地区協力宣教司牧協力司祭
ルイス・グティエレス	松山地区協力宣教司牧協力司祭
ハビエル・レチョン	松山地区協力宣教司牧協力司祭
松永洋司	高松地区協力宣教司牧モデラトール（番町教会担当）
栃尾泰英	高松地区協力宣教司牧協力司祭（桜町教会担当）
オルザイス・フランシスコ	高松地区協力宣教司牧協力司祭（坂出教会担当）
浜口末男	高松地区協力宣教司牧協力司祭（小豆島教会担当）
濱口秀昭	高松地区協力宣教司牧協力司祭



教皇ベネディクト16世の任命書が掲げられた

区の信者三四名が、喜びと祈りのうちに参加させていただく日だ。式場の白百合学園のホールには、一五〇〇人を超える信徒や、多くの司祭、日本の全司教団が、更にローマ教皇大使も出席して、新司教の着座式が盛大・厳粛に行われた。この会場では、高松教区の信者のために、前列の三・四列目の席を確保してくれ親切な案内をしていただいた。祝辞に立った溝部脩司教様に、温かい信徒の拍手が鳴り止まない。あんなに優しい表情で話す溝部脩司教様の顔を始めて見た。平賀徹夫新司教様が、謝辞の中で高知の信徒から貰ったという手紙の件が披露された時、自分たちの小さな行為が癒しに役立ったこと、そして平賀徹夫新司教様の心に留まっていたことに胸が熱くなった。また紹介を受けて立った、高松教区から駆けつけた私達に、会場から温かい拍手が送られた。この日を境に、溝部脩司教様の気持は、今後の高松教区の再生に全力で向かう決意を胸に収められたことであろうと、推察された。その高松教区にも三年後をしっかり見据える覚悟が求められているのだ。

中島町教会　岡副俊雄

☆東北巡礼と仙台教区新司教様着座式の旅の詳しい状況は、高松教区ホームページに掲載します。
第一日目を番町教会上埜テルミさん、第二日目を桜町教会鶴見典子さん、第三日目を桜町教会和田伸さんにそれぞれ寄稿していただきました。
是非ご覧ください。
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

ミサにおける『典礼聖歌』
ミサにより良く与るために

ミサは歌に始まり、歌に終わります。主日のミサでは、三つのみことばが宣言され、ミサの間に、少なくとも九～一〇の歌（典礼聖歌）が歌われます。即ち、入祭の歌、あわれみの賛歌、（栄光の賛歌）、答唱詩篇、アレルヤ唱（又は詠唱）、奉納の歌、感謝の賛歌、平和の賛歌、拝領の歌、閉祭の歌等です。更に、主の祈り、使徒信条も歌われる場合を考えますと、ミサにおける典礼聖歌の占める割合は大変大きいと思われます。更に、奉献文も歌われるときには、歌ミサの言葉どおり、神への賛美の歌によってミサ全体が包まれるのです。三本松教会の典礼委員として、私は主任司祭及び信徒の皆さんのご協力を得て、次の様なことを心掛けています。

一　歌詞は一番だけで終わらず、最低二番まで歌う。

二　歌えるところは極力歌うこと。例えば、共同祈願の意向のあとの祈りとか。

三　喜びをもって大きな声で歌う。

主任司祭ネルソン神父のご指導によって、ミサに、より良く与るため、第一朗読のあとと第二朗読のあと、直ぐに歌に入らないで暫く黙想し、みことばを味わう時間を持ちました。これによって心に安らぎが得られ、より一層心を込めて聖歌を歌うことが出来ました。又、季節によって、七つあるミサ曲を変更するとか、奉納の歌は歌わずにオルガンだけにするとか、変化を持たす事も試みました。

みことば、ゆっくりと大きな声で宣言されることによって、私たちの中により深く入ります。そして、強く私たちを回心に導き、私たちは新しい人に生まれ変わることが出来ます。特に、福音が宣言されると、私たちの中にいる悪魔はキリストの力に怯えます。みことばには力があり、悪魔を追い出します。或る神父様に云われました、「あなたは分からなくても、あなたの心の中にいる悪魔は、キリストの言葉を聞いて震えている」と。目で読むのではなく、口で宣言される聖書は、神の声であり、力があります。

ペトロの信仰宣言のあと、私達はご聖体を戴きます。私は、ご聖体を戴くとき何時も、「エフェソの信徒への手紙一・四～五」を思い出します。「私はこの世に生まれて来る前から、神様に導かれて来たのだ」と。今、七五年の人生を振り返って、自分の計画ではない神の導きの道を歩いて来たけれども、神様が与えて下さった現在の生活に感謝し喜んでいます。今日のミサも、信徒が口を大きく開けて歌う素晴らしい聖歌の響きが、小さな御堂一杯に広がっています。

三本松教会　笹瀬孝夫

三本松教会聖堂

コルベ神父資料館を訪ねて

いつの頃からか、夏には家族で帰郷することが、毎年恒例となっておりました。しかしながら、今年は家族に促されて、春休みの三月二〇日に長崎へ行ってきました。

今回の帰郷の目的には、意外にも、今までに行ったことがないという家族の要望に応えて、観光名所を訪れることにしました。それで、どこがいいのか考えた挙句、もう四〇年程行ったことがなかった大浦天主堂へ行ってみることにしました。

その御聖堂の横に、ド・ロ神父様が設計されたという神学校の建物があります。この建物の一階が資料館になっており、順路を辿ると最後の部屋がコルベ神父様の資料室になっております。いろんなものが飾られていますが、やはり、何と言ってもアウシュビッツ収容所の囚人となった絵を喰い入るように見てしまいました。

「憎しみからは何も生まれません。愛だけが創造するのです。苦しみは私たちを消滅させません。私たちの霊が主の前にもっと強くなれるよう、助けてくれるのです。」今の社会に生きる人々の中には、心がかなり歪んでいるように見受けられる人が多くいるように思われます。私には無理かも知れませんが、この言葉の境地に少しでも近づけたらと願ってしまいました。

坂出教会　小野雅之

懐かしいキリストとの出会い
洗礼志願者として

とても幼い頃、カトリック信者である両親に連れられて訪れた教会のことを覚えています。けれども、幼児洗礼を受けることもなく、教会と長い間離れた生活を送ってきました。

結婚を機に再びゴミサに与る機会に恵まれ、懐かしい「恩師」のようなキリストに出会いました。今では信者である主人と小さな子どもと共に中島町教会に通っています。人の温かさ、たとえばクリスマスの時期など季節ごとに装いを変える教会の雰囲気が好きです。

洗礼を間近に控え、ある時まではこのような時を迎えることが出来るとは思いもよらなかったのに、これも主キリストのお導きとありがたく思わずにはいられません。

受洗後は、更に自分自身の信仰を深めていきたいと思います。そして少しでも教会の共同体に関わっていけるよう努力したいと思いますので、ご指導のほどよろしくお願い致します。

中島町教会　御庄律子

人間はかけがえのない大事な存在である
高知ボランティア・ビューローの活動

高知ボランティア・ビューローは、出会う、分かち合う、生きるを活動精神として、社会の中で、社会とともに、社会のために活動し、今年で開設三一年になります。ビューローの活動には種々ありますが、今一番大事な活動は親子グループワークです。

それは「人間はかけがえのない大事な存在」を基礎とし、親も子も大事な他者として出会い絆を深めるため、「聞く」・「話す」・「対話」を三つの柱として、親の提出する事例で体験し、身につけていくものです。この三つを簡単に言いますと、「聞く」は他者が自分の体験、感情、価値観に対して責任をとる余裕を与え、手助けをする。「話す」（私のメッセージ）は関わりの中で肯定的であれ、否定的であれ体験したことを誠実に伝える。「対話」は自分の子と、価値観を話し合ってお互いを知り、お互いをより大事にするようになることです。人間の根本は自分を認めて欲しい、つながりが欲しい、関わりが欲しい、親しみが欲しいということにあります。そして何より親子の関わりが人間関係の基本であると言われているのです。

江ノ口教会　市川公子

四旬節黙想会
赦しの秘跡の大切さを再確認

桜の開花が待たれる三月一二日、中島町教会では四旬節第二主日のミサの説教で、又ミサ後に、諏訪神父とブラッドリー神父と共にミサを司式なさった溝部司教のご指導を仰ぎ、三部構成の黙想会が持たれた。

黙想会での溝部司教

協力司牧態勢が進んでいる江ノ口・中島町の二教会合同ミサでは洗礼志願式も行われ、七人の志願者が洗礼準備期に入った。

さて、この日の福音はマルコ九・二～一〇、これを受けて黙想会の講話第一部のテーマは「彼に聞け」。聖書を味読しようということだった。

第二部のテーマは「赦しと癒し」。ルカ五章、マタイ五～七章を引用され、イエスに出会って初めて罪の自覚がもたらされると話された。

「他人に舌の災いを与えていないか」の問いかけが胸に痛かった。そして、心の奥底にある性（さが）というか業（ごう）を赦してくれと祈ることで、癒しの秘跡が授けられると説かれた。

第三部は昼食後、テゼの祈りJesus, remember me when you come into your kingdom を習い、歌って始まった。第二部を更に敷衍（ふえん）し、罪の連鎖を断ち切る為に赦しの秘跡があると話された。ミサを通じて世界に救いがもたらされるとも言われ、目から鱗の落ちるような思いをした。別府出身の司教様は罪の赦しは温泉の効用に似て、「体内の毒気を出す」のだとユーモアたっぷりに説かれ、四旬節中の回心式につなげられた。

体調が優れない由で心配だったが、仙台では三月四日に平賀新司教様の叙階式が行われて安堵なさったご様子も伺え、共同体も慶事を祝い、高松に愛車で急ぎ戻られる司教様を感謝の念でお見送りした。教会の刷新の為、霊の道を真摯に歩むことを肝に銘じたい。

中島町教会　吉竹圭子

賑やかに教会学校
教会で楽しく過ごせる時間を

毎月第二、第四日曜日の御ミサの後、おうどんを食べたり、芝生で遊んだり、それぞれ元気に飛び跳ねている子どもたちを集めるのは至難の技。やっと集合しても、おしゃべりに花が咲いて賑やかな教会学校が始まります。今は人数が少なく、小学生と幼児が一緒にやっていますが、少ない今だからこそ、教会で楽しく過ごせる時間を作ってあげたいと思っています。「こじか」で勉強する以外に要望を聞いてゲームやカード作り、そして先月は、ペットボトルを利用しての小物作りに挑戦しました。細かい所まで丁寧に仕上げをしている姿や、次々と出るアイディアに感心してばかりでした。いつかこの子達が、大人になり神様のみもとに集まった時、今のこの時を、暖かい心で思い出してもらえたら、とても嬉しいです。

クリスマス聖劇を演じた
日曜学校の子どもたち

徳島教会　河野恵理子

みんなで復活させよう

カトリック女木教会

高松市の沖合い四キロのところに女木島があり、女木島の港から徒歩一〇分ぐらいのところにカトリック女木教会があります。建物は民家で、かなり古く昭和三五年ごろに建てられたもので、私が小学生の時に、日曜学校の遠足で訪れたり、青年会の頃には交流会で利用したりしました。

昨年の一一月に、司教様と話をする機会があり、八月のケルン大会のことを聞きました。世界中から大勢の青年達が集まって野宿までして話し合ったと、まるで御自分が青年であるかのような情熱で話されました。「この青年の力を、今教会は必要としている」とおっしゃっていました。私達が青年の頃は、高松司教区に「いばらの冠」があって、毎年夏になると高知県の施設に大勢集まってボランティア活動をしていました。今の青年にも、このような機会があれば情熱が出せると思いますが、なかなか見つけ出せないで迷っているのではないでしょうか。

今現在の女木教会は、草も生えるに任せて建物も傷んでいます。司教様に、この話をしたところ、青年達の手で女木教会を復活できればいいなとおっしゃっていました。早速、濱口秀昭神父さまと下見に行ってきましたが、草だけでなく木も背丈以上に生えていて、建物も屋根や壁が相当傷んでいました。そして、今年の三月に草刈りに行こうと、元青年達に声を掛けて、浜口末男神父様はじめ有志数人で草刈りをしました。

３月草刈りの時の女木教会

女木教会が復活することで、教区内の青少年活動や信徒達の活動に利用できるようになればと思っています。青年達が、この女木教会復活の活動に少しでも興味を持っていただければ幸いです。私をはじめ元青年達も、その時には力をお貸しするつもりでいます。

番町教会　八尾憲治

お知らせコーナー

本の斡旋

【題　　名】平和への夢
【販売価格】1,200円（消費税込み）
【内　　容】永年続いているイスラエル・パレスチナ紛争の被害にあった少女が永年に亘って平和を願って書いた日記です。
　この本は、「イスラエル・パレスチナ遺族会」が1996年３月にパレスチナの自爆攻撃で亡くなったイスラエルの少女バット・ヘン・シャハク（当時15才）さんが、永年平和を願って書いていた日記をお母さんが遺族会に提供してくれたものを本にして出版しました。日本でも、この本を日本語に訳して出版しようという運動が起こり、賛同者を募集しました。溝部司教様もこの本を読んで感動し、出版の賛同者となりました。この本が漸く出来上がりました。高松教区でも、出版賛同者である司教様の一人でも多くの人に少女が書いた平和へのメーセージを読んでいただきたいという願いもあって高松教区事務所で取り扱うことにしました。
【申込方法】郵便またはＦＡＸでお願いします。
郵　便：〒760-0074　高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当　宛
（℡087-831-6659）
ＦＡＸ：087-833-1484

投稿記事募集

【字　数】原稿は３００字以内（写真歓迎）
【内　容】記事の内容は自由、ただし中傷・誹謗はご遠慮下さい。
～その他募集要領は高松教区報109号（2006年１月１日）に記載のとおり～
【投稿先】メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074　高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当　宛
（℡087-831-6659）
ＦＡＸ：087-833-1484

司教日程

５月６日～11日（土～木）
教皇大使公式訪問
５月13日～14日（土～日）
札幌教区司教青年カテケージス
５月20日～26日（土～金）
聖パウロ会黙想会指導
５月28日（日）　ルルド祭（三本松教会）
５月30日（火）　長崎教区幼稚園総会
６月１日（木）　常任司教委員会
６月４日（日）　聖霊降臨祭（カテドラル）
６月６日（火）　司祭評議会
６月８日～９日（木～金）
合同修練長研修会（東京）
６月11日（日）　堅信式（郡中教会）
６月12日～16日（月～金）
司教総会
６月18日（日）　カトリック医師会
６月26日～28日（月～水）
大阪管区司祭研修会

編集後記

◆高松教区では、宣教司牧評議会が発足しました。青少年委員会も体制を新たにして活動を始めました。新しくシスターを迎え生涯養成委員会も発足しました。信者の皆さまが一致協力をして活発に活動していく体制を整えられました。◆教区報も隔月に発行するようになり、より多くの方から、投稿していただいております。ただ残念なのは、本年一月一日発行の教区報で、信者の皆さまからの自由なご意見を投稿していただこうと、信者の声欄を設けましたが、これまで投稿が一件もありません。◆これからは、信者の皆さまとともに、教会をどのようにしていけばいいのか、一人ひとりが、考え、声を出し、意見を言いながらお互い手を携えて高松教区を盛りたてて行きたいと思っております。皆さまのご意見をお待ちしております。

（広報担当　和泉文男）